

ようこそ！

「ありがとうパーティー」へ

〈大阪市城東区 なかよしすみれ保育園〉

卒園間近の5歳児が、お父さんお母さんに感謝の気持ちをこめて夕食のおもてなしをする「ありがとうパーティー」。「お母さんたち、喜んでくれるかなあ」調理する子どもたちの目は真剣です。



当日は、子どもたちが案内から司会進行、会場装飾まで自分たちで進めました。手品披露も好評で会を盛り上げ、温かく心のこもったパーティーに保護者はみな感激。



ハンバーグや千草焼、煮物等の入ったお弁当をみんなでつくりました。



2月の生活発表会では、劇『たつのこたろう』を演じた16人の5歳児、たいよう組の子どもたちです。なかよしすみれ保育園では、お米や食べ物が実際にどのように育っているのかを知ろうと、屋上での作物育成やおコメ作り体験などを通して食育活動を行っています。今回の劇のテーマもその延長で取り組みました。

なかよしすみれ保育園では、ほとんどの子どもが0歳児で入園し、6年間の保育園生活を送ります。幼児クラスは18～20名の小集団で、小さい時から生活を共にしてきた子どもたちはみんな気心が知れて兄弟のようです。一人ひとりを大切に、そして集団でいろいろな経験を積みながら力や知的好奇心を育み、就学前の土台の力がしっかりしたものになるよう保育をしています。一人ひとりをしっかり受けとめてもらい、愛情たっぷり子育て子どもたちには安定感があります。親同士の交流も密で、子どもの成長を共に喜び、親子で一緒に育ち合う集団になっていることが、園にとっても大きな支えになっています。

子どもの発達を確かなものにする保育、そして親が安心して子どもを預けられ、地域の子育て支援にも力を発揮できるような保育園でありたいと思っています。待機児がまだまだ多い城東区です。0歳児の途中入所の相談も多く、できる限り応えながら子どもたちの健やかな成長や親の就労が保障できるよう、これからもみんなで力を合わせていきたいと思っています。

(写真：下野祇園 文：谷口純子)

【ひろばトーク】

「なくそう！ 子どもの貧困」全国ネットワークを立ち上げて 山野 良一 6

●特集● 行き場を失った子どもたち

「ひとりぼっちじゃない。生まれてきてよかった」

孤独な子どもの心に灯をともし—子どものシェルターは“救急救命センター”

- カリヨン子どもセンター理事長 坪井節子さんに聞く 9
チャイルドラインから見える子どものすがた 高橋 俊行 19
子育て世帯が待ち望んだ保育料の無料化、軽減が実現！ 新保久美子 23
高い出生率を支えるフランスの家族・教育・労働政策
ジャニック・マーニュ (訳・鈴木雅生) 27

●トピックス●

- 日本国憲法と若者、そしてぼくのこと 浅尾 大輔 34
第3回釜ヶ崎のまちスタディツアー 40
第16回社会福祉研究交流集会in東京 42

●連載●

- フォーラム 「貧困」と向き合える福祉労働者をめざして 前田 鉄雄 46
自立を求め続けた41年 中途障害を負って 原 静子 48
東桃谷幼児の園 街角の保育園
地域にある保育園として 大橋貴美子 50
相談室の窓から お母さんの手記から② 青木 道忠 52
社会科学の窓から見える 社会福祉ひろば
参院選と主権者の目 (中) 鍋谷 州春 54
わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」
私の地域医療 (その13) 早川 一光 56
よりあって おりあって—宅老所よりあい物語—
ドイツ訪問 (その1) 下村恵美子 58
育つ風景 陽だまりのなかで 清水 玲子 60
落合健二のニュース私考
日本の安全保障に無縁の海兵隊はいらない 落合 健二 62
映画案内 『赤い風船』 吉村 英夫 64
現代の貧困を訪ねて 高校無償化と朝鮮学校 生田 武志 66
海外社会保障事情 子どもがいる貧困家庭への支援
—ニューヨークのホームレスシェルター— 福岡 麻紀 68
私の研究ノート
雇用のあり方、労働条件は、保育士の専門性にどう関連するか 小尾 晴美 70
ホームレスから日本を見れば ありむら潜 72
花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 74
バリアフリーな社会をめざして
“色”について気軽に聞ける環境を 内山 紀子 75

今月の本棚 33／みんなのポスト 44／ことばで遊ぼう！ 73／
福祉の動き 76

●グラビア● ようこそ！「ありがとうパーティー」へ
～大阪市城東区 なかよしすみれ保育園～

福祉のひろば

2010年5月号

●表紙の作品●

神門やすこ



●カット●

川本 浩・田上明子

「なくそう！ 子どもの貧困」 全国ネットワークを立ち上げて

「なくそう！ 子どもの貧困」全国ネットワーク

山野 良一さん

「辛いとか、死にたいとか思うのは、病気のせいかもしれないけれど、周りの人間から見れば、ただ病気のせいにして甘えていると思われような気がします。なので、私は病院に行かないで、死ぬほど働こうと思います。私は甘えている人間だと思われたくないのです。」

「なくそう！ 子どもの貧困」全国ネットワークの設立準備シンポジウム（二〇一〇年一月三十一日、於立教大学）で報告された、学費滞納によって高校の卒業証書も授与されず、大学進学もあきらめてしまったある若者の言葉です。

彼女の辛さは、いまの日本の子ども・若者たちを絡めとっている貧困の網を表象しています。七人にひとり、約三〇〇万人もの膨大な子どもと、その家族に貧困ライン以下の困窮生活を強いているだけでなく、子育ての責任を家族にだけ押しつけ（家族依存主義）、さらには子ども・若者たち自身にさえ自己責任論を強いるのが、現代日本の貧困のあり方なのです。その自己責任論の残酷さによって、彼女のように無理な努力を重ねてきた子ども・若者たちが、傷つき、もがいているのです。

二〇〇九年夏に発刊された『子どもの貧困白書』を企画立案するなかで、このネットワークの必要性が討議されてきました。私たちが目指すのは、市民や当事者（子ども・若者）が参加しやすい、ゆるやかな幅の広いネットワークづくりです。また、福祉・教育・医療・法律・ジャーナリストなどさまざまな領域の方々に参加いただければと考えていま



やまの りょういち

1960年生まれ。1985年、福祉専門職として神奈川県入庁。児童相談所での児童福祉司などの業務に長年従事。2005年～07年にかけて、アメリカ・ワシントン大学ソーシャル学部修士課程に在籍し、児童保護局などでイン턴タンとして働く。ソーシャルワーク修士（MSW）。2010年4月、神奈川県を退職し、「なくそう！子どもの貧困」全国ネットワーク設立に奔走中。著書に『子どもの最貧国・日本—学力・心身・社会におよぶ諸影響』（光文社新書、2008年）、共著書に『子ども虐待と貧困—「忘れられた子ども」のいない社会をめざして』（明石書店、2010年）、『子どもの貧困白書』（編集委員、明石書店、2009年）。

す。

子どもの貧困をなくすためには、子どもの貧困の実態の解明や社会的な広報も必要だと思いますが、私たちはさらに子どもや若者をめぐるさまざまな制度や政策の貧困さを浮かび上がらせ、政治的、社会的にその改善を求めていきたいと思っています。

今年一月から動き始めたばかりのネットワークですが、授業料やその他の学費が払えず卒業ができない、高校で学びたいと希望しながら定時制高校への志願者が急増したために入学ができない、そうした子どもや若者たちの状況を少しでも改善するために、「卒業クライシス」問題として、衆議院第二議員会館で集会を開いたり、厚生労働省や文部科学省へ要望書の提出をしたりしてきました。そのなかで、生活福祉資金の活用などについての通知を厚生労働省や文部科学省から引き出し、一定の成果をあげてきました。

私たちのネットワークにご関心のある方は、ぜひともブログなどをご覧になってください（<http://anichildpoverty.blog100.fc2.com>）。またブログから専用のメーリングにどなたでも参加できます。多くの人々の力によって、子どもの貧困根絶を幅広い運動として盛り上げていくように活動していきたいと思っています。応援をお願いします。

（四月二五日（日）午後一時から、東京・池袋の立教大学八号館で私たちのネットワークの設立記念シンポジウムを開きます。宇都宮健児・日本弁護士連合会会長や当事者などからの発言があります。どなたでも、当日でも、参加できます。詳しくは、ブログを参照してください。）

特 集

行き場を失った子どもたち

子どもの貧困シリーズ第4です。今号は、行き場を失った子どもたちと向き合い、励まし、支える人たちを紹介します。

本誌は、“子どもたちの今”を発信し続けてきました。もちろん発信だけでは弱いと考えます。それでも全国各地で、子どもの貧困と向き合う取り組みが動きはじめています。社会から排除された、されそうな子どもたちの現実と向き合いを考えます。

16歳・17歳の、行き場を失った少女たち。時には、性産業の生贄として穴に落とされようとしています。家庭にも戻れない。家庭からの排除、学校からの排除、社会や地域からの排除。

子どもシェルターカリヨンの実践は様々なメッセージを運んでいます。

チャイルドラインから見える子どもの姿。大人たちと子どもたちとの距離を感じざるを得ません。離れたいと願ってはいないのに、現実は離れています。

少子化が続く渋谷区からは、子育て支援施策前進の報告を。

ジャンニック・マーニュさんのレポートはフランスの子育てを通して、子どもとは何か？ 大人とは何か？ 親とは何か、そして、社会や国家とは何かを問いかけます。今回の特集からも日本の社会福祉のあり様を問いかけます。

(編集主幹)

「ひとりぼっちじゃない。生まれてきてよかった」

孤独な子どもの心に灯をともす

子どものシエルターは「救急救命センター」

——カリヨン子どもセンター理事長 坪井節子さんに聞く



坪井節子理事長

保護者の経済的問題や健康上の理由、虐待など、さまざまな事情で家庭での養育が受けられない子どもたちが、乳児院や児童養護施設、里親家庭など、家庭に代わる環境で社会的養護を受けています。

しかし一〇代後半で、保護者から虐待を受けたり、少年事件を起こして家庭への引き取りを拒否されたり、あるいは家庭そのものがないなどで、緊急に保護が必要な

状態であるにも関わらず、行き場がない子どもたちが大勢います。

そんな子どもたちが安心・安全に避難し、今後の生活を考えることのできる場として、二〇〇四年、全国初の子どもシエルター（緊急避難場所）「カリヨン子どもの家」が東京に生まれました。その後、名古屋、横浜、岡山にもNPOができて、現在四つの子どもシエルターが活動しています。

「カリヨン子どもの家」設立時

のいきさつは本誌〇四年七月号でもご紹介しましたが、その後、子どものシエルターがどのような活動をしているのか、また一〇代後半の子どもたちが抱えている問題や社会的養護の課題などについて、社会福祉法人カリヨン子どもセンター理事長で、弁護士坪井節子さんにお話を聞きました。

◆行き場のない一六〜一七歳

シエルター「カリヨン子ども

家」に入居した子どもたちは、〇四年六月の開設以来、一六〇名近くにになります。年齢は一四〜一九歳で、なかでも一六〜一七歳が多く、また女の子が四分の三以上を占めています。入居期間は二週間未満から一、二か月です。

へなぜ女の子が多いのか？

男の子は、家に居場所がないと、中学生ぐらいで家出や非行に走り、警察に保護されて家庭裁判所や児童相談所などでの早めの対応が可能です。でも女の子は家出をすると、援助交際やテレクラなどの性産業に狙われる危険性がとても大きく、それが怖くて中学生の間は我慢する。しかし一六〜一七歳になって交友関係が広がり、友人などから「逃げるところがある」

と教えてもらい、「これ以上、家には居られない」と逃げてくるのです。

カリオンはそういう子どもたちであふれています。定員四名の女の子のシェルターは今も満員で、三人が待機しています。そのうちの一人はDV被害の女性シェルターに受け入れてもらいましたが、そこも満員なので簡易ベッドで寝ているうえに、入所は二週間が限度です。他の子は知人の家に居ますが、長くは居られません。早くシェルターに入れてあげたいけれど、今シェルターにいる子どもたちの行き先もまだ決まっていない状態です。

狭間の一六〜一七歳

一五歳までなら、大人たちが見

◆カリオンとは◆

ヨーロッパの教会の塔の上にあるような、大小の鐘を連ねてメロディーを奏でる楽器。

「たくさんの鐘が一つずつ音色を持ち、次々と響きあい、ハーモニーを奏でる様子が、子どもたち一人ひとりの命を大切にできる世界への希望を指し示すように思っ名づけました」(坪井さん)

児童養護施設や里親制度を利用して、義務教育だけは修了させようとしています。一八歳以上だと就労先やアパートが見つけやすくなります。一六〜一七歳はその狭間です。高校生なら児童養護施設に入所できることもありますが、学校に行っていない子はまず受け入れられません。児童福祉法は一八歳までが対象ですが、現実問題として、児童養護施設では高校生と同じ年頃